

国際シンポジウム「国民・国家・食——食とアイデンティティーの超域的な言説を求めて」をめぐる

会期：2019年1月26日～27日  
会場：名古屋大学文系総合館7階 カンファレンス・ホール

魏晨

名古屋大学「超域文化社会センター」は、2018年4月に設立された。その前身である2013年設立の「アジアの中の日本文化」研究センター同様、地域や分野を超えた日本文化研究を目指し、様々な学術イベントを主催してきたが、名称に「社会」というキーワードが取り入れられているように、人文学のみならず、社会科学なども視野に入れ、より広範かつ多様な学術活動が行われている。

国際シンポジウム「国民・国家・食——食とアイデンティティーの超域的な言説を求めて」は、「超域文化社会センターの出発点として、国内外の多様な研究領域の研究者を結び、近現代における食の意味と表象について検討し、人間理解におけるその重要性を明らかにする」ものとして企画された。シンポジウムのテーマ「食」については、以下のように述べられている。「食は個人の身体のみならず国体の基礎となり、また国家と社会、個人と集団のアイデンティティーの基礎となります。資源であると同時に、アイデンティティーの象徴としても機能し、個人や集団を引き寄せ、また引き裂きます。「同じ釜の飯を食う」ことは、家族や友人の絆を深め、信頼を強化します。一方、階級や民族、ジェンダーなど、様々な差異を刻印します。食は、美学から戦争まで、人間のあらゆる営みに影響を及ぼしており、遍在的かつ普遍的なものといえます」。また、「食」に「国民、国家」からアプローチし、「人間の生活における普遍的な課題である「食」を出発点に、近代国家におけるアイデンティの政治性などにも論点を広げ、超域的な検討を行う」という。

確かに、わたしたちは食べないと生存することさえ叶わない。その点で、食はすべての人に関わるテーマである。一方で異なる地域、異なる民族、異なる宗教、異なる性別、異なる世代の人々が食べる物は全く同じというわけではなく、むしろ千差万別である。シンポジウムでは、それぞれの領域、それぞれの国・地域・エスニシティの研究者からみて、さまざまな知見が示されるだろうという期待を持ち、二日間のシンポジウムに出席した。

初日の26日午前中には、センター長の飯田祐子氏の挨拶の後、新世代パネルというセッションが行われた。新世代パネルはアソシエイツを務める大学院生が自らテーマを企画し、パネリストを集めて成立したもので、フレッシュな感じを受けた。テーマは「エネルギーの人文」である。

スターク・アーロン氏が歴史学から「『大名古屋』へ——帝国の主要都市としての名古屋(1907-1945)」について、朴根模氏が文化人類学の視点から「エスニックタウンの食が生み出す文化的力動性——大阪コリアンタウンの食文化とアイデンティティーの関連性を中心に」について、王黛茜氏が環境社会学の視点から「反原発と有機農法との関わり——台湾第四原発反対運動を事例に」について、山田宗史氏が文学研究の視点から「健啖家の文法——開高健「新しい天体」を中心に」についてそれぞれ報告した。どの研究も将来性があふれる興味深い研究である。これから考察をより深め、オリジナリティを高めていけば、さらなる発展が期待される。

超域文化社会センター 国際シンポジウム TCS International Symposium  
Center for Transregional Culture and Identity

# 国民・国家・食

食とアイデンティティーの超域的な言説を求めて

People, Nations, Food: Toward a Transregional, Transdisciplinary Discourse on Food and Identity

2019.1.26(土)、27(日) 会場:名古屋大学カンファレンスホール(文系総合館7階)

主催:名古屋大学大学院人文科学研究科 超域文化社会センター (M-Center: nishihag@nagoya-u.ac.jp) | 入場無料 | 事前予約不要!

1,26 seats 1,27 seats

●キックオフ Session (17:00-17:05)  
開会式 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学)

●キックオフ Session (11:00-11:05)  
開会式 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学)

●キックオフ Session (18:00-18:05)  
開会式 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学) / 開会挨拶 飯田祐子氏 (名古屋大学)

午後の部では、本シンポジウムのコーディネーターを務めるネイスン・ホブソン氏の開会の辞を経て、セッション1の報告とディスカッションがなされた。報告者カタジーナ・チフィエルトカ氏と陳玉箴氏はどちらも日常的な物をテーマとしつつ、よりマクロな歴史の視点からアプローチを行っている。前者の報告「歴史と事実の尊敬へ——お土産を例として」は日本特殊な文化と言える「お土産」を取り上げ、お土産の「伝統」がいかに作られたのかについて明らかにした。後者の報告「レシピ本における東アジア交流——「占領下台北における『台湾食』」は植民地時代において「台湾食」がどのように記述され、概念化されてきたのかについて明らかにした。

二日目の27日午前中は、セッション2として昭和初期、占領期、戦後1950年代—1960年代のそれぞれの時代における、「食」をまつわる歴史についての報告がなされた。河西英通氏による「昭和初期の「東北飢饉」をどうとらえるか」の報告では、メディアを通して東北飢饉の表象が作り上げられ、戦争動員にも利用された経緯が示された。藤原辰史氏の「給食の日本史—GHQ占領から学校給食法制定までを中心に」の報告では、戦後給食が成立した過程を考察し、現代に至る給食の意義が再確認された。ネイスン・ホブソン氏の「栄養指導車と戦後日本の食生活の変遷」の報告では、1950年代から始まり1970年代に入って徐々に衰えた栄養指導車が、日本人の食に関する選択やキッチン様式など、食生活に大きく影響を与えたことを示唆した。

午後のセッション3では、コリアン文化に関する二本の報告が行われ、食べ物に対するナショナルな意味づけに関する考察・議論がなされた。金兌豪氏の「ブルガリアから韓国へ——乳酸菌が韓国の食文化として再発見された歴史的経緯」の報告では、健康意識や生活様式の変化によって、乳酸菌を含むキムチに対する認識が変化する過程を追うことで、乳酸菌が韓国の食文化として再発見され、ナショナリズムと結び付けられることが論じられた。最後の発表者岩田・クリスティーナ氏による「詩に刻むキムチ——「在日」詩人の描く食・ジェンダー・差別」の報告では、在日コリアンの文学テキストにおけるキムチの表象が分析され、キムチの描写から在日コリアンのアイデンティティ問題が探られた。

今回のシンポジウムは文学・歴史学を中心にプログラムが組まれており、多様な研究対象、多様なアプローチが示され、非常に充実したものであった。とくに、以下の

三つのことについて、活発かつ濃厚な議論がなされたと考えられる。

一つは食をめぐる言説やアイデンティティの構築である。現在では自明なものに見える食文化は、実はそうではなく、遡れば構築されたものでしかないことがわかる。お土産・伝統文化、飢饉の表象、レシピ・台湾料理、乳酸菌・韓国食についての報告は様々な角度から、食のアイデンティティがいかに構築されたのかについて、提示するものであった。

もう一つは食をめぐる生活史の問題である。人が何をどのように食べたか、生活に不可欠な「食べる」こと及びその周辺の歴史が提示された。食、あるいは食生活は、生存の基本でありつつ生活様式にも深く関わる議題である。給食の歴史、栄養指導車の研究はそれぞれのテーマを用いてその食生活の歴史の側面を浮き彫りにした。

最後に、文学テキストにおける食の表象についてであるが、在日コリアン詩人とキムチの表象に関する報告がそれにあたるものであった。文学研究は歴史学に接近している部分があるものの、問題意識や研究方法は大いに異なっている。文学テキストにおける食の表象をどう研究するのかについて好例が呈示されたといえよう。

今回のシンポジウムは食を通して歴史を、または歴史を通して食を見るという点において、非常に多様かつ充実した内容が生まれ、個人的にも大変勉強になった。それらの知見を踏まえて、より発展的な議論を展開する意味で、以下の二つの問いについても考えてもよいのではないかと思われる。

まず、食をナショナルな枠組みにて論じること、があげられる。今回のテーマが「国民、国家、食」だったこととも関連するが、食が国民国家（あるいは国家を超えるという意味でのトランスナショナリズムの議論も同じ地平といえるかもしれない）と結び付けられて議論されることの含意について、シンポジウムを聞きながらずっと考えていた。例えば「国民食」という国民国家レベルの「食文化」が議論されていたが、これは「単一民族国家」神話が有効な場合でしか存在し得ない。筆者が生まれ育った多民族国家・中国には、国民食は存在しない。たとえば、春節に餃子を食べるというのは「北」の一部の地域にしかない習慣だし、そもそも民族によっては、餃子どころか、春節を過ごさない人も多い。アメリカやカナダのような移民国家にも「国民食」は存在し得ないのではないか。前述のように、食は人間の営みに関わる最も本質的なもので

あり、国民国家より長い歴史を持っている。とすると、食という複雑な現象をナショナルな枠組みで議論することは、どのような点で示唆に富み、一方でどのような論点を見逃してしまうことになるのだろうか。

また、何を論じれば食を論じることになるのか、ということについて考えてみるのもよいかも。今回のシンポジウムは歴史や文学が中心となり、社会学や映像学の専門家も議論に参加したが、食の研究領域は他にもあり、議論の余地はまだまだ大きいと言えるだろう。食べることは生物の本能であるため本質主義的な側面がある一方で、その行為には地域、民族、性別、年齢などの社会的文化的な要素も含まれる。各研究領域でそれぞれ食を取り扱うことは重要であるが、一方で、食という現象を解明するにあたっては、様々な分野の知識を総合的に活用するような「超域」的研究をより大胆に進めることが、リアリティを反映し、かつ新鮮な知見を得ることに繋がるのではないだろうか。

二日間のシンポジウムに参加し、大変有意義に過ごした。食、食生活、さらにそれにまつわる諸問題は、これからも重要な課題になっていこう。食に関する人文・社会科学の研究を期待してやまない。